

「モリイク」は、コープ未来の森づくり基金が、森と人、森づくりと人をつなぐ目的で発行している冊子です。



北海道のあしたの森を育てる
コープ未来の森づくり基金
コープ未来の森づくり基金は、組合員さんのノーレジ袋へのご協力で支えられています。

あした
コープ未来の森づくり基金レポート

モリイク

MORI - IKU

森に行こう。
森で育とう。
森を、育てよう。

vol. 31
Apr. 2026

編集後記

また戦争が始まってしまった。
4年前の、ちょうどモリイクの編集作業をしているときにはウクライナ戦争が始まり、とても心配で仕事も手につかなかったことをよく覚えています。そしてまた冬季パラリンピックの前に、同じように理由も定かではないような戦争が始まったのです。その間のパレスチナ問題ももちろん忘れてはいけません。言うまでもなく戦争は最大最悪の環境破壊です。いくら木を植えたって足りない。気候変動は待たなしの世界的課題なのは明らかなのに、いまだに世界は分裂したまま爆弾の力で動いている。

自分たちの仕事が本当に空虚に思えて絶望してしまいそうになります。でも小さな一つの声の世界を変えることにつながったことは何度もあります。大国の論理が植えた木を焼き払っても、どんなに世界が変わっても、何度でも小さな苗木を育てていこう、そう思った春でした。



「居場所」を必要とする人のために

森の多様性は
多様な人を迎えられる

モリイク vol.31 2026年4月発行
発行元/ コープ未来の森づくり基金



この冊子は環境に配慮してベジタブルオイルインクと、適切に管理されたFSC®認証林およびその他の管理された供給源からの原材料で作成されています。



モリイク

* contents *

- *02 コラム 森づくりのトレンド
未来のための市民による森づくり
- *04 あそびにしようよ！ 森の中へ
どんぐりはかせの森あそび研究所
- *06 特集 居場所づくりは森づくり
ひつじひろばへようこそ
- *12 いのちと向きあう
むかわのジビエ
- *13 もっと樹のことを語ろう
大きな木の小さな物語
- *14 ほっかいどう 森のイキモノSOS
変化する冬の海で氷縁のアザランはどう生きていくの？
- *16 木育essay
沈黙の声 ～炭点前の花
- *17 Fの森の今を伝える
Fの森通信
- *18 コープ未来の森づくり基金報告
あすもりフォーラム 2025 など

Starting Column 森づくりのトレンド

あした 未来のための 市民による 森づくり 最終回

「コープ未来の森づくり基金」がつくられてから20年近くたちました。全国でも市民や事業者による様々な森づくり活動が進められていますが、コープの森づくりはどんな特徴があるのか、改めて考えてみたいと思います。

第1に挙げられるのは、多くの組合員が参加して、たくさんの方の植樹を行ってきたということです。単に木をたくさん植えるというだけではなく、組合員が環境運動の一環として植樹に取り組んできており、森とかかわる人の

つながりを広げることに大きく貢献してきました。また漁協の植樹活動にも協力して、協同組合間の連携での森づくりを進めることもできました。

第2は「Fの森」において他に類を見ない市民による森づくりを行ってきたことです。全国の先進的な森づくり活動としては、プロ並みの技術を持った活動や、参加型の里山の活用を進める活動があります。Fの森は、組合員がゼロから森を学びながら、ゼロから森をつくって

きたという点で、全国でも類を見ない活動だと思います。組合員が、専門家の指導を受けながら、自ら植樹のデザインをし、植樹をし、育林をして、未来に向けた森づくりを継続しているのは、森づくりの本道ともいえると思います。最近では、みんなでつくってきた森を舞台にしてフェスティバルを開催したり、職員の研修の場とするなど、活用する試みも始まっています。

第3は森づくり団体への支援で、森づくり団体の活動を

支え、また、新しい森づくりのプロジェクトを支援してきましたが、あすもりによる支援の特徴は助成金による支援で終わるのではなく、支援をきっかけとして、組合員活動と助成団体のつながりが生まれてきたことです。団体を訪問し、現場を見て学ぶことから始まり、団体の活動に参加したり、一緒に活動をするなど、地域での森づくりの新たなつながりが生まれてきています。

こうしてみると、組合員が

りに取り組んできたことがあすもりの特徴といえ、まさに協同組合だからこそできた森づくり活動といえると思います。

当初設定した基金の目的にそって活動が発展してきていますが、「植樹から木の活用までを視野に入れた、循環型の森林づくりを促進します」にある「木の活用」まではたどり着けていません。あすもりで植樹した木が成長するにはまだまだ時間がかかるので仕掛け作りが難しいですが、これからの課題として考えられればと思

ます。
5年前に今後のあすもりを検討するための検討を行い、今後の方向を「北海道の森と暮らしをつなぐ活動をひろげていきます」とする提案をしました。木の活用も含めて森と暮らしがつながるとはどういうことなのか、協同組合らしさを生かして考え続けられればと思います。✿



柿澤 宏昭
(かきざわ ひろあき)

北海道大学 名誉教授
コープ未来の森づくり基金 運営委員長

1959年神奈川県横浜市生まれ。北海道大学大学院農学研究科修士課程修了。持続的な森林管理を多様な人々の協働で支える仕組みづくりを、ポスト資本主義を模索しつつ考え続けていこうと思います。主な著書として『日本の森林管理政策の展開』、『保持林業』など。



どんぐりはかせ

森あそび研究所

その⑥ 春の花を味わってみよう！※

お花が次々に咲く楽しい季節♪春のお花に注目です！

※野のものですので、よく洗うなど、衛生には十分気をつけてください。



はなちゃん

はなちゃん

一番乗りは、やっぱり♪

フキノトウ

雪が解けたら真っ先に咲くフキノトウは、アキタブキのお花。咲いたお花はオス株とメス株があるよ。見分けてみよう！



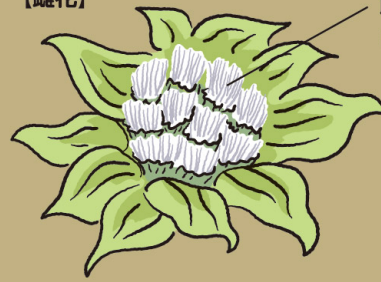
フキノトウとフキノ葉は土の下でつながってるよ

【雄花】



雄花はよく見ると5枚の花弁があり、花束みたいでカワイイ♪

【雌花】

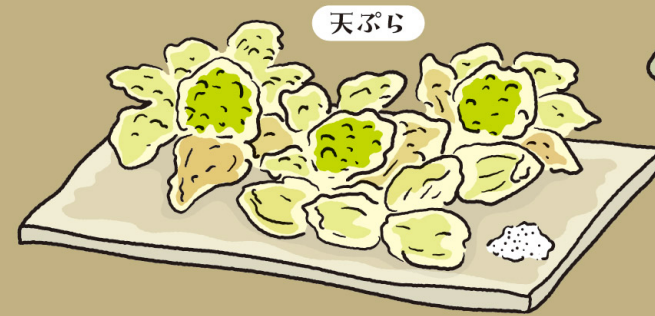


雌花は、毛がふわふわしている花だよ。

味わってみよう！



山菜としても人気！ちょっといただいて、少しお味噌汁に入れるだけで春の香り♪天ぷらもオススメ。ちょっと大人の味かな？



天ぷら

フキミソ

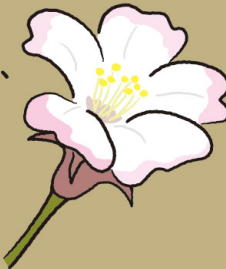


春の花と言えばこれ！

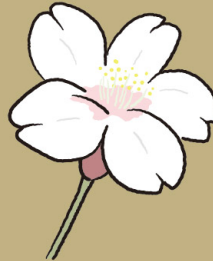
サクラ

ピンクの可愛いお花はみんな大好き！まず咲き出すのは、エゾヤマザクラ（オオヤマザクラ）濃いピンクのサクラです。ソメイヨシノは、全体白っぽく花も多く華やか。その他にも、サクラはたくさん種類があるので調べてみてね。

エゾヤマザクラ



ソメイヨシノ



味わってみよう！

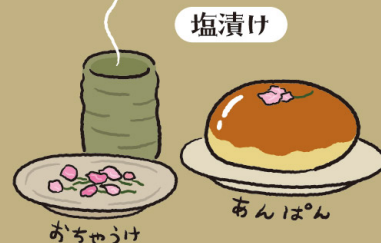


花びらを少しいただいて、ゼリーの中に閉じ込めて春のお花ゼリーなんていかがでしょう？ゼラチンと砂糖があれば作れます。八重桜の花は塩漬けにして楽しむこともできますよ。

桜ゼリー



塩漬け



おちゅうけ

あんぱん

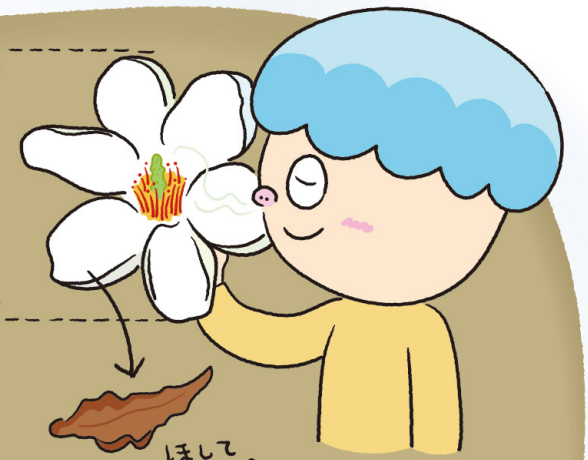
おっきな白い花！キタコブシ

味わってみよう！

花びらを少しいただいてよく干します。ティーポットに入れてお湯を注げば、香りのよいお茶になります。

サクラより先に咲くまっ白いコブシのお花。とても香りが良いのでぜひにおいを嗅いでみて。

10センチくらい



ハーブティー



ほしてパリパリ



1リットルまで！ほさなくてもできるよ

探してみよう！イタヤカエデ

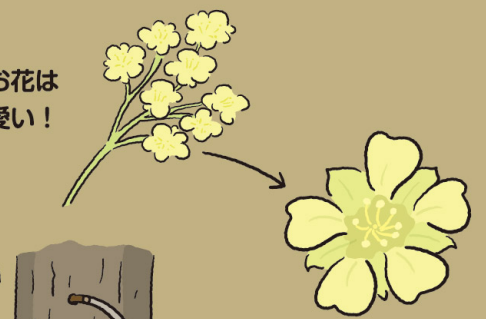
味わってみよう！

2月下旬～3月上旬に樹液が出ます。本場カナダのサトウカエデよりは香りが少ないですが、甘くておいしい樹液が出ます。煮詰めるとメープルシロップに！

イタヤカエデの黄色いお花はよく見るととっても可愛い！



木に穴をあけるときは許可をとりましょう



あま！



メープルシロップ



3月頃、枝先にツララがきていたら味見してみてもね。甘いかも！

よんでみよう！



知りたい北海道の木 100
身近な街路樹・庭木・公園樹（亜璃西社）
佐藤 孝夫 著
★北海道の身近な樹木を厳選して紹介。入門編の樹木図鑑です。



さくらら (アリス館)
文：升井 純子 写真：小寺 卓也
★日本で一番遅く咲くサクラの目線で春を感じられる絵本です。



身近な樹木の生き方観察 12 か月 (文一総合出版)
鈴木 純 著
★北海道にはない樹木が多いですが、木の観察方法がわかりやすく紹介されています。



“お母ちゃんラボ”の
居場所づくり

みつじ ひろばへ ようこそ



室蘭の片隅のちょっとした空き地は
子どもとお母さん、お父さんがやってきて
気楽に遊んで、お弁当を食べて帰る、
ただそれだけの場所です。

でも、その気楽に遊べる場所は、
誰かを守っている
大切な“森”かもしれないのです。



お母ちゃんラボ
中田 美穂さん

神奈川県横浜市出身。4人の子育てをしながら「あそびく」の活動場所である「みつじひろば」を整備し、ヒツジを飼育している。専門はロケット工学。

🐏 お母ちゃんラボ @ <https://www.instagram.com/okaachan.lab/>
※Instagramは承認が必要です。



ひっじひろばの一日



ここに集合！
「ひっじひろば」は
こんなところ

頃合いを見て
はじまりのあいさつ

まずは絵本の読み聞かせから。
冬だから、今日は木の冬芽の絵本だよ

できたかまくらで
遊んだり
おにぎり食べたり、
たのしいな

そりはやっぱり楽しい！

集まったら
さっそく遊びはじめる
子どもたち

子どもも大人も楽しい場所づくり

ある日、
室蘭の空き地で

「ひっじひろば」があるのは、室蘭の奥の住宅もまばらな場所。一見ただの空き地のようだけど、参加者が来て雪山に登ったり雪だるまを作りはじめると、一気に楽しそうな声が響き渡って賑やかになりました。

この日、ひっじひろばで行われる「あそびひろば」には5組の親子と大学生のボランティアが参加しました。ごちんまりとした集まりだけど、みんな自分が好きなように遊んでいるのが印象的です。絵本を読んだり、ちょっと向こうまで散歩に行くために集まることはあるけど、それ以外は自分たちが気に入った遊びしかない。しかも、大人たちも一緒に遊ぶ。自由で開放

されたような空気が広がっているのです。参加者の金沢さんは「共働きだから子どもと過ごす時間が取れなくて、こういう場所があることがありがたい」と言っています。中学生の息子さんと大きな雪だるまを作っていました。そんな「あそびひろば」を運営するのは「お母ちゃんラボ」の中田 美穂さん。ご自身も4人の子育てをしながら、みんなが来て思い思いに過ごせる場所をつくりたいと活動しています。

ももとは幼稚園でお母さんたちが集まって、隣の登別市にある自然体験施設「ふおれすと鉱山」を舞台に、子どもたちと自然の中で遊んだりおやつを食べたりする交流の場だったのが「あそびひろば」。でもコロナ禍で縮小してしまったのだそう。無くなりそうになった時に、こうして

子育てしている親がお互いに助け合うような場が消えてしまうのはもったいないと、中田さんが活動を引き継ぎ、室蘭市内にも活動拠点として整備したのが「ひっじひろば」で、2025年からはこちらでもあそびひろばを行えるようになりました。

自然の中で ヒツジと子育てをしよう

中田さんは、第一子が生まれた時に室蘭で子育てを始め、育休後に職場のある神奈川にもどったのですが、こちらは何をすることも人が多いしギスギスしていて、子育てをするにしても相談したり助け合ったりする人もいない。その孤独さや虚しさから「これは無理だ」と思ったそうです。そんな中、夫の転勤もあって再び室蘭へ。官舎で

は子育てを助けてくれる人もいたり、窓から見える木々（エゾリスが来ることも！）や、「あそびひろば」で訪れる登別の自然に癒され、「自然はいい！」と直感したといっています。北海道は、それまで暮らしていた神奈川に比べると自然が圧倒的に豊かだし、道東の標津で森と動物に囲まれて自然保育をしている知り合い※にも刺激を受けつつ、室蘭でもできることはあるのではないかと一念発起したのです。

ところで、ヒツジに興味を持ったのは、草刈りに便利という話を聞いたから。実際にヒツジを借りてみたら家の庭では足りず、ヒツジを放せる土地を探していたところ、いろんな人の協力があってお寺が所持している空き地を好きに使っていいということになり、「ひっじひろば」につながっ

たそうです。ヒツジがいることで、それを目当てに来てくれる参加者がいたり、逃げ出したヒツジのために周囲の家に頭を下げてまわっているうちに協力してくれるおばあちゃんに出会ったりと、動物がいることでつながりも広がったとか。



※「お母ちゃんラボ」Instagramより

こうしてたくさんの人からの刺激や助けによって今の活動が支えられているのだと話してくれました。

「居場所」は 社会問題の解決にもなる？

「あそびひろば」の活動のねらいはどんなところにあるのでしょうか。ひとつは、中田さんご自身が体験したように、子育てが大変だということ。その大変さをお互いにフォローしあったり、気楽に話せる場が必要だと感じたそうで、「子育ては大変なのに、周りに頼れる人がいないんです。私は官舎で周りのお母さんに助けられました。そういう、みんなでお互いを気にして「最近どう？」って話せる場が月に一度あったらいいよね、っていうことが大切なんだと思います」と、話してくれました。実際にこの日に家族4人で参加した飯出さんのお父さんは「妻はここで会うお母さん

※モリイクvol.15の特集「森と川で育て、子どもたち。森と川のようなちえんコロボックル」で紹介しています。



親子で遊ぶとたのしいね！



子どもだけでも遊ぶよ！

木登りしてちょっとピンチになっても自分たちでどうにかするんだ

向こうの方にも行ってみよう！そりに乗って



シカのうんこ発見！



たちと知り合いになって新しいつながりが子育ての息抜きになっているみたいで。自分も、ここがなければ仕事ばかりになるから、新しい交流ができて楽しいです」と、ここに来ることで親の側も助かっているのだと言います。それについても、「大人がリラックスできる場、それが目標でもあるんですね」と中田さん。

もうひとつは子どもたちの居場所のこと。近年は不登校の子どもがとて増えていることを実感しているそうです。「公園で遊んでいたらちょっとしたことで学校を通じてクレームがあったりするんです。監視されているような世の中では子どもたちも公園でのびのび遊ぶこともできない」と、今の世知辛い社会について、「それが子どもたちの生きづらさにつながって

いるのではないかと残念そう。

「今は昔と違って、不登校の子たちにもいろんな居場所があるけど、好き勝手に遊べる場所が子どもには必要です。その選択肢が増えるように、いろんな居場所があればいいじゃないですか」と中田さんは話してくれました。そういう子たちには、「ひつじひろばのベンチづくりも手伝ってもらったんです。みんなで座るからって。ヒツジの柵を塗ってもらって、ヒツジ喜ぶからって。達成感と役割を持ってもらうと、そこが居場所になるじゃないですか」という心遣いも。基本的にここでは自由に過ごしてもらおうけど、一応そのように子どもたちに合わせてプログラムは考えているとのこと。この日も「みんなー！雪積みして遊ぼう！」と声をかけるも、反応する子はおら

ず、それぞれそりや雪だるまづくりなどの好きな遊びをしていました。せっかくのプログラムは無駄になりましたが、それを、ちょっと苦笑いしながら「今日は美しい日だったね」という言葉で振り返ります。一人一人がやることを持っている時間というのは、そこが自分の居場所として成立している、ということなのかもしれません。

いつまでもつながれる場所を

子育ては大変。でも子育てのフェーズが変わっていくとお母さん同士の関係性も変わって、一時期は支え合っているうち関わりも関心も薄くなってしまいがち。子育ては孤独だとよく聞きます。「幼稚園が終わっても、子どもが小学生になって



たくさん遊んでつかれたらお風呂はんをいただきます！



野菜いっぱいのけんちん汁、おいしい！



おやつにマシュマロを焼くよ



たくさんあそんだから手がつめなくなったり、もう眠くなる子も



まだまだ遊び足りない子も、



好きなだけ好きな時間をすごして、疲れたら終わり。また来月あそぼうね！

またね！

居場所づくりは森づくりでは

も、ここに来てちょっとお茶を飲んでいる話ができる、そんな場にしていけたらいいな」と中田さんは話します。「いろんな年代のお母さんが楽しく子育てできたらいいいと思います。楽しくってというのは、「みんなで子どもを見あえる」ということだと思うんですよ。そして何かあったら頼ったり、おしゃべりできるっていう関係を育てていきたいです。

そんな中田さんですが、実は道外の森のようちえんでスタッフとして働くことも考えているとのこと。「私もがつつり保育に関わってみたい。学びの時間かな、とも思っています」と、「動物と暮らす場」をつくることを次の目標に、子どもと共に育つ場を目指してステップアップすることも考えているのだそう。

子育ての支援のあり方や、子どもたちの不登校と居場所づくりは大きな社会問題といえます。政府からもさまざまな政策が出されていますが大きく実を結んだ成果は未だないといえるでしょう。そんな中で親も子どもも、幼児も不登校の子たちも、みんなが来て、それぞれが楽しみや役割を持てる、そんな場はまさに多様性がなければできないことで、その舞台こそ森がふさわしいと思うのです。2025年のあすもりフォーラムでも「帯広の森・はぐくむ」の日月さんが言及したように、森にはたくさんの隙間と包容力があることを考えると、こうした社会問題の解決の糸口が、

実は森づくりにもあるのかもしれない。

「ひつじひろば」は、木登りなどができる木立はありますが、森というにはちょっと無理がある場所です。でも中田さんは森での楽しさも知っているの、植樹をするなどしてより森を意識した環境づくりを目指しています。見た目は空き地の遊び場に過ぎないかもしれませんが、そこにはいろんな人がいろんな過ごし方ができる多様性がありました。その「場づくり」はもう、「森づくり」と言い換えても間違いではないのかもしれない。そしてそれが、いろんな生きづらさを抱えた今の人たちの少しの救いになっているのなら素敵なお話です。親子がゆったりした時間の中で思い思いに過ごす様子を見ながら、そんなことを考えさせられました。

※ 18ページの「あすもりフォーラム2025 森と人のつながりを広げる」をご覧ください。

いのちと向きあうジビエの話

植える→育てる→使うことで保たれる森林。木づかいColumn
木を使うことも、森を守ることにつながっている。



むかわのジビエ

https://www.instagram.com/mukawa_no_jibie/

シカ肉といえば、近年は全国的にジビエとして定着してきました。でも、クセがある、硬い、など、いまだに美味しい肉というイメージではないかもしれません。むかわ町でシカ肉の処理場を開き、名のあるレストランとの取引をしつつ、シカ肉加工品を作る「むかわのジビエ」の本川さんは、そんなジビエのイメージや価値観を変えようと挑戦する人です。

「そもそもヨーロッパではジビエは高級品です」日本でそのイメージがなかなか根づかないのは、やはりハンターの質によって肉の味は大きく影響を受けるから。ハンターになる以前、札幌で食べたシカはとてもクセが強く、シカ肉ってこういうものかと思っていたのだそう。でもむかわで師匠の撃ったシカはとても美味しかった。それ以来、1頭1頭を大切に撃ち、丁寧に処理をして出荷し、料理人からも厚い信頼を受けているのだそう。

実はこうした「腕のいいハンター」は特に珍しいわけではありません。質の良いシカ肉を取れる多くのハンターがいる中で、本川さんの「1頭のシカ」へ向ける思いは深いものがあります。

「子どもの頃、家庭の事情で飼っていた犬を保健所に連れて行ったんです」と、保健所に歩いて犬を連れて行ったこと、保健所から帰って来て思ったことなどをととつと語ってくれました。「そのことが今でも心に引っかかっているんです」と、「いのちと向きあう」仕事を目指したきっかけを教えてくださいました。そのこともあって、シカを撃つ時も「苦しめないように」一撃で仕留めることにはこだわっているのだそう。そしてそれは結果的には一番良い状態で肉を取れるということにつながっています。そして撃つと、連れて帰って、処理をして送り出す様子からはシカ1頭1頭への深い愛情が見て取れます。そのシカへの向き合い方の違いは料理をする人や食べる人にも伝わるのかもしれない。

本川さんがシカを撃つことになった理由は、やはり昨今のシカの増加と人との軋轢にありました。害獣とされるけれどもシカが悪いわけじゃない。あまりにもたくさん殺される今のシカ対策にも疑問がある。それなら自分がやる。犬を保健所に連れて行ったのは私が殺したということ。他の人よりも自分がやるべき仕事なのではないか。でも、シカを撃つても一人で食べ切れるわけじゃない。このままでは「命のバトン」をつなげない。無駄になる命に引き金が引けなくなった時もあったといいます。それなら、シカ肉を無駄なく利用するために処

理場を開設したのでした。また、本川さんは、人と自然のつながりについても両者の距離があまりにもかけ離れているといいます。自然を敬い、正しく畏れる。自然に人は生かされているということを知ってほしい。「シカはともに北海道に生きる仲間。そういう意識が大切」。だから、「シカを撃つ人、使う人、食べる人、無駄にせずにつながりを切らない、北海道らしい命のいただき方、自然へのマナーを大切にしたい。この仕事はそうしたことを伝えていける仕事だと思っています」と、そのいのちへの向き合い方はどこまでも真剣です。

むかわでは森にも異変が起きているといいます。シカは増えている。けど、とても痩せているのだそう。「ナラの木が減ってドングリもあまりつかず、シカが食べられていません。良いシカ肉は良い森づくりから、と思っています」と、森を育てるにも、もっと山に良いやり方があるのではないかと思います。

あの日、保健所に連れて行った犬からシカと人と森まで線を引き、その「いのちのバトン」をどう受け渡していくか、「それは、シカと私の約束なんです」と、本川さん。シカも人間も、私たちはみんなつながっている。その中で、「ちゃんといのちと向きあっているのか」と問いかける。本当のジビエとは、そうして味わうものなのかもしれません。



むかわ あきよ
本川 哲代さん

会社員を経て農業やハンターを生業にしたいとむかわ町へ移住。2016年に「いのちのバトン」レーの場を目指し、「むかわのジビエ」を立ち上げた。札幌生まれ。

Column 植樹の図鑑 知っておこう。私たちが植える木にも物語がある。

大きな木の小さな物語

②5 ツノハシバミ

ツノハシバミは高さ3~4mの落葉広葉樹低木。主に本州が分布域です。北海道内の分布域は狭く、後志から留萌地方にかけての日本海側です。

一つの花の中に雌しべと雄しべがある雌雄同花ではなく、雌雄同株といって同じ木に雌花と雄花が別々に咲くタイプです。

公園などで植えられることもなく、多くの人にとってはなじみのない名前かもしれません。でも、ツノハシバミの仲間・ヨーロッパハシバミの果実は「ヘーゼルナッツ」として食べられています。これならば、どこかで一度くらいは食べたことがあるのではないのでしょうか。

一つの花を抱くように小型化した特殊な葉を苞、それが集まったものを総苞と呼びます。ツノハシバミは花が終わるころになると総苞が伸びてきて、果実が熟すころにはまるでペリカンのくちばしようになります。昔の人はこれを角に見立て、「角ハシバミ」と名付けました。ハシバミの語源については諸説あり、ここでは省略。

ツノハシバミは、カバノキ科ハシバミ属。シラカンバやハンノキなどと同じ科です。カバノキ科の樹木の種子は基本的には風散布型です。種子に翼と呼ばれるヒラヒラがついていて、風を受けやすい形になっています。これに対してハシバミの仲間は最初に「ナッツ」ということばを使ったように、ドングリと同じように堅果という大きな実をつけます。つまり動物散布型なのです。同じ科なのに風散布型種子と動物散布型種子の両方があるなんてほかにもあったかしら？

ツノハシバミの果実。野生のものはまだ食べたことがありません。4月末に開花を確認してから果実が熟する直前までは観察しているのですが、その後不明。ひよっとしたら熟したころにはエゾリスかほかの動物に食べられてしまっているのかも。今年の夏の宿題が一つできてしまいました。



果実 総苞

未熟な果実(断面) 未熟な果実

雄花 雌花

芽生え

text/images 孫田 敏

‘54年山形県長井市生まれ。’77年北大農学部林学科卒業。林業、その後造園・緑化工事に従事。’90年から建設コンサルタント。緑化計画が専門。技術士(建設部門・建設環境)。著書：アトリウムと植生(積雪寒冷地型アトリウムの計画と設計：絵内正道編著)、水辺林復元計画の基本的考え方と計画の進め方(水辺域管理—その理論・技術と実践—：砂防学会編)、森林管理と市民参加(北のランドスケープ 保全と創造：浅川昭一郎編著)

WEBサイト「Scan Botanica」<http://scanbotanica00.sblo.jp>



参考文献 佐藤孝夫,2011,増補新版 北海道 樹木図鑑,345pp,亜細亜社 日野間彰,FLORA OF HOKKAIDO, <http://www.hinoma.com/maps/index.shtml> 2026年2月28日閲覧 清水建美,2001,図説植物用語事典,323pp,八坂書房 牧野富太郎,1961,牧野新日本植物図鑑,1060pp,北隆館

画像材料提供:雪印種苗(芽生え)



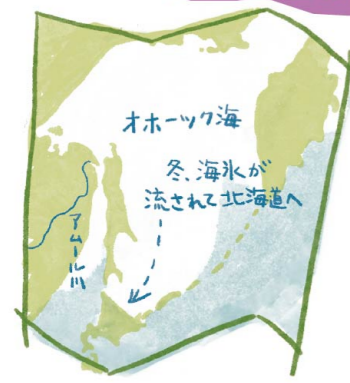
海を白く埋めつくす道東・道北の冬の風物詩、**流氷**。
 この流氷がオホーツク海の豊かさの源。
 「**氷縁生態系**」と呼ばれる、
 世界でも珍しい自然の仕組みを作っています。
 しかし今、**地球温暖化**によって、流氷がどんどん減少しています。
 海の悲鳴に耳を傾けてみて。
 それが今回の**SOS**です。

その4 変化する冬の海で 氷縁のアザラシは どう生きていくの？



流氷をたよりに生きる
 「**ゴマフアザラシ**」に注目して、
 冬の海の変化がもたらす影響はどんなこと？
 海の命のつながりを見守り、つないでいくには？
 何が起きていてどうすればいいのか、考えてみよう。

北海道は、流氷を見ることができる、
 世界最南端の地域



オホーツク海の北西部では、アムール川から流れ込む淡水によって薄まった表層の海水が寒さで凍り、海水が作られます。それがシベリアから吹く北西季節風や海流によって南へ運ばれ、海上を漂う「**流氷**」となります。流氷は約1,000kmほど南下し、1月下旬から3月頃に北海道のオホーツク海沿岸へ到達します。

ここ数十年、流氷が来る「**接岸初日**」は遅く、岸を去る「**離岸最終日**」は早くなり、流氷が滞在する期間は短くなりました(1980~90年代は約50~60日、近年は約30~40日)。その上、流氷の南限は北上、いずれ北海道に来なくなるかもしれません。
 流氷の面積と厚さは30年前から3割も減少。21世紀末には8割も減る可能性があります。理由はシベリアの寒気が弱くなったこと、海水温の上昇で凍るのが遅くなったことなどです。

流氷が運ぶ命が、次々つながる 「**氷縁生態系**」

流氷のまわりの海は生き物たちにぎわっています。流氷の底では「**アイスアルジー**」と呼ばれる植物プランクトンが増え、春になると海中へ広がります。これらは動物プランクトン(オキアミやカイアシ類など)の重要なエサとなり、それらを食べる魚や甲殻類が集まり、さらに海鳥、そしてアザラシやクジラなどの海獣もやってきます。
流氷の海では多くの生き物がつながる、豊かな生態系がつくられているのです。



集まった動物たちのフンや、流氷が運んできた鉄などの栄養分は、昆布などの海藻の成長に利用され、海の生産を支えます。

氷と海の両方を利用する ゴマフアザラシ



ゴマフアザラシは流氷に依存して生きる動物

交尾期が終わり、流氷が溶け始めると、海岸で休みながら北上。冬に流氷ができるのを待ちます。

北海道周辺で見られるアザラシは5種類※。中でも流氷と強いつながりを持つのが、ゴマフアザラシです。出産と育児を流氷の上で行うため、**流氷がないと繁殖できません**。地球温暖化の影響を特に受けやすい存在です。 ※ゴマフアザラシ、ゼニガタアザラシ、クラカケアザラシ、ワモンアザラシ、アゴヒゲアザラシの5種

あまり海に入らず、お母さんのお乳だけですくすく成長

フワフワ白い産毛は氷の上で保護色に



オホーツク海やベーリング海の流氷に先がけて北海道へ。2~4月、氷上で目立たない白い毛の赤ちゃんを出産。流氷の上は安全に休息できる大切な場所、赤ちゃんの命を守ってくれます。

生後2~3週間でひとり立ちをし、子アザラシは泳ぎも捕食も自分で覚えていく

母親が子ばなれて、発情するのを雄アザラシが近くで待っています。

アゴが大好き



SOS!!

海が暖かくなり
 流氷はどんどん速く、小さく……



「流氷の上にゴマちゃん親子」北海道の観光ポスターでおなじみの風景ですが、温暖化の影響でゴマフアザラシが出産・授乳する場所も北上。調査では2020年以降、流氷の北上によって、**北海道で親子の姿を見る機会はほとんどなくなっています**。
 ゴマフアザラシには、出産から親ばなれまでの時期を過ごす氷の厚みや広さが必要なのです。流氷の「**氷縁**」で育まれる豊かな命のつながり「**生態系**」を守るために、私たちにできることは何か、いっしょに考えていきましょう。

地球の生命は海から誕生しました。海と陸は切り離された存在ではなく、ひとつの循環の中でつながっています。海が豊ければ陸も豊せ、豊かな海のエネルギーは陸の自然や人の暮らしを支えてきました。オホーツク海では、流氷が運ぶ栄養がプランクトンを育て、多くの生き物を支えています。しかし近年、流氷の減少によって氷を利用して出産や子育てを行うゴマフアザラシの生息環境が変化し、その数の減少も懸念されています。流氷の海を守ることは、海と陸のつながりを守ることでもあります。

北海道に定着したアザラシもいる

岩礁で出産するため、赤ちゃんは親と同じ、岩にまぎれる鏡形の模様で産まれます



襟裳岬周辺や道東の太平洋側で見られるゼニガタアザラシ。日本にただ一つ、北海道に定住して一生を送るアザラシです。1960~70年代に数百頭まで減って、レッドリスト(北海道で絶滅の危機のある動物)に入りましたが、繁殖地の岩礁を守る活動や、商業捕獲をやめるなどの保護活動で、生息数が回復しつつあります。

アザラシは害獣なの？

アザラシは網にかかった魚を食べる、網を破るなど「**漁業被害を与える動物**」として問題視されることがあります。被害対策として、音による追い払い・網の改良、さらに捕獲数などを厳しく管理された上で、許可捕獲が実施されることもあります。

お話を聞いた人



こばやし まり
小林 万里

東京農業大学生物産業学部 海洋生物学科 教授

野生生物と北海道に憧れて愛知県から北上、1995年北海道大学獣医学部卒業。北海道大学で博士(獣医学)を取得。「百聞は一見に如かず」の研究スタイルで、フィールド重視。「赤色」と「お酒&なめろう」をこよなく愛する。専門分野は海生哺乳類学、海の生態系における海棲哺乳類の役割について興味がある。NPO北の海の動物センター理事。

NPO北の海の動物センターHP <https://www.kitanouminodoubutsu.org/>

morinoko factory



新岡薫/エトブン社、モリノコ商会
 北海道のイキモノをテーマに絵と文を描いている、札幌出身のイラストレーター。森と湿地、動物園、水族館、博物館の散策を好む。道民ですが初めて流氷を見たのは昨年、一面の白い海に驚き感動この景色は無くしたくないと思いました。
<https://etobunsha.com>



宮本尚/モリノコ商会
 森好き、ヘンなイキモノ好きは、オホーツク海を眺めて育った子どもの頃から。環境保全やヒグマ対策の仕事しながら、歌をつくって演奏するシンガーソングライター。宮本尚Song-Gardenというバンドでライブハウスなどで歌っています。
<https://naoeaster.wordpress.com>



沈黙の声 ～炭点前の花

11月の終わり、北海道が冬の気配をみせて灰色に沈んだ頃、わたしたちはすっかりお馴染みになった旅に出た。まだ紅葉も進んでいない近畿方面へ、複数の仲間と連れ立って、ワークショップの道具をファミリーカーに積み込み、2日かけてフェリー船で海を渡る優雅で非効率な木育旅である。

旅中、おとぎ話のように美しい里山で経験した初めてのお茶会の話をしたい。場面は日本一の里山と謳われる兵庫県黒川にある茶室。

子どもの頃、母がお点前を習っていたことがあって、出てくるお菓子目当てに練習に付き合っ作法の真似事をしてきた記憶がある。裏千家だか表千家だかも覚えていないし、教わったことがちゃんと身につけているかも甚だ怪しい。なので、略式とはいえ茶懐石に招かれたとあって、とても緊張した。手の込んだ料理が載せられた脚付きの懐石膳や、床の間の掛軸と椿の蕾、主人の厳かな所作。映像でしか見たことのないシチュエーションである。

しわぶきひとつない静かな空間で、緊張のあまりガチガチに固まってしまったわたしの耳に、微かな音が聞こえてきた。そちらに目を向けると炉に載せられた茶釜の湯が沸く音だった。炉にくべられているのが当地黒川でつくられている『一庫炭』その丸く放射線型に割れの入った美しい形から花になぞらえて、菊炭とも呼ばれている。黒川で一軒だけ残っている炭焼き窯で、クヌギの木からつくられた最高級品種の茶道用の炭をつくっている。火にくべるとさらに花めいてくる。独特の香気を放ち、黄金色に輝く。まるで生きた菊花さながらである。美しいだけではない。炭

火で沸かした湯は茶に合うのだ。そのメカニズムは炭火の火力にある。急速に温度が上昇し、沸点に達したあとはゆるやかに弱まる。簡単に電気で沸かした湯のように、一定の高温のままではないので、湯の中の酸素を消費せずまるやかさを保つことができる。また、適度な温度に抑えられるために苦みを増すカテキンやカフェインの抽出が抑えられ、反対に甘みのもとであるテアニンなどのアミノ酸の抽出を助ける。一見非効率に思われる方法が実は理にかなっているのだと気づかされる。茶席の主人に、茶の作法は美しいだけではなく、一つひとつが合理的で、深い意味をもっているのだと教わった。

音がわたしを落ち着かせてくれたのだろうか。炭点前の湯相、湯の沸くプロセスは6つの段階があって『釜の六音』といわれるらしい。なかでもわたしが聞いたのはお湯の沸くシューという音。松林を抜ける風の音に見立てて、『松風』という。やわらかく、甘やかな音を聞いているうちに、お茶という非日常の体験を、ゆったりとした気分楽しんでることに気づいた。

お茶会が終わり、『仕舞』となると炉にかけられた茶釜に水が差される。それまで茶席の空間を満たしていた、ともすれば意識されないほどの幽かな音が、ふっと途絶える。沈黙が満ち、茶に溶けていた『わたし』が残る。炭が燃え尽き、粉雪のような灰が残るように。▲

text / 齊藤 香里

介護事業所での管理職などを経て、現在は夫とともに『ようてい木育倶楽部』を運営し、木育の活動を行っている。介護福祉士、ケアマネジャー、木育マイスター。

下の森通信

Fの森から
と遊ぼう!

Fの森フェスティバル の舞台裏には

初めて開催された「Fの森フェスティバル」はみんなの力で作り上げたお祭りでした

2025年の9月23日は、あすもりと「Fの森」にとって特別な日となりました。今まで森づくりの場でしかなかったこの場所に、森を楽しむことを目的として「Fの森フェスティバル」が開かれたからです。快晴の秋空の下、多くの人々が、文字通り森を楽しむことを目的に訪れたこのイベントは、「Fの森」が持つ「意味」が、ひとつ新しくなったできごとだったのでした*。

そんな「Fの森フェスティバル」はあすもりだけでできたわけではありません。みなさんと森づくりを続けてきたあすもりだけでは、森を楽しむ場所にするための知恵も、大きなイベントを野外で開くための知識も足りません。つながりのあるマンパワーを総動員して夏を通して準備ができました。

中には毎週のように現場に通ったスタッフもいますし、夜遅くまでオンライン会議が続くことも。大人気だったオオアワダチソウの巨大迷路もその時々きてくれた人で少しずつ整備したものです。ガイドウォークの補助のためにガイドリハーサルも行われ、野外で行われるイベントのために細かい指導や注意点の確認が繰り返されました。そんな大変な準備から実施に関わった人たちはあすもりの森づくりネットワークのほかにも学生のボランティアさんやコープさっぽろの職員、コープさっぽろ文化教室の講師、地元当別町を拠点にするキッチンカーやコーヒースタンドなども。とてもここで一人ずつ紹介できませんが、奇跡のような「Fの森」の一日を支える多くの人々が力を貸してくれたのでした。これこそ、みんなでつくる「Fの森」らしいことなのではないでしょうか。そしてこんなふうに森づくりも森を楽しむことも、ずっとこの場で続いていけばいいな、と思います。

*詳しくは、モリイクvol.30「Fの森 新しい風景」をご覧ください

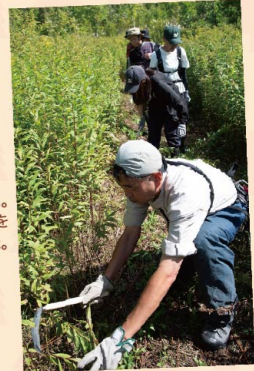
コープさっぽろの職員さんとの研修も

あすもりの活動はコープさっぽろの中でもあまり知られていませんでした。せつかくの取り組みなのに、もっと内部にも知って欲しい！そこで、「Fの森フェスティバル」はもちろん、近年は職員さんに「Fの森」に来てもらって、森づくりについて研修に組み込んでもらう取り組みが始まっています。「Fの森」に来てくれた職員さんは木々を育てるためやトレイルを整備するための草刈り、看板のメンテナンスなど、さまざまな作業をしますが、山の中で気持ちよく体を動かせたり、森づくりの意義を知ることができ、また来たいという感想も聞かれました。

「Fの森」についてはコープさっぽろのYouTubeチャンネルでも動画が配信されています。この機会にぜひご覧ください。



巨大迷路のメンテナンス。説明を受けて鎌で細かい手入れをしていました。



ガイドウォーク補助のための研修。ヒグマについてのお話を聞く。



キッチンカーやコーヒースタンドも登場。豊かな森の時間を演出してくれました。



コープさっぽろ文化教室からヨガやウクレレなど、講師の方も参加してくれました。

コープさっぽろ YouTubeチャンネル よりどうぞ

Event Report 森づくりを語ろう

あすもりフォーラム 2025 森と人の つながりを広げる

10月8日、今年のフォーラムは50周年を迎える「帯広の森」での事例を中心に、「森と人をどうつなげるか」をテーマに開かれました。改めて、森のすばらしさや豊かさを共有し、その中でどう活動を進め、どう課題を解決していくのか、未来の森づくりのために考えました。



森と人の つながりを広げる

帯広の森・はぐくむ
日月(たちもり) 伸



森で生まれたヒトの文明が森を食い潰してしまっ、現代においても森での体験は絶滅しつつあります。森での体験はほかに置き換えることはできません。

帯広の森は2025年で50周年。広報物の発行や学校教育、子ども支援団体などと連携してより多くの人に森に関わってもらい、森と人をもう一度つなげる取り組みを続けています。

そもそも多様性・多層性の豊かな森は間口が広く、しかも深い。どんな活動でもどんな人でも関わるたくさんの隙間と包容力があります。多様で複雑な森そのものが持続可能性をもたらす、そこにいるんな人が関わればよいのではないのでしょうか。

森を知り、 育て、楽しむ

帯広の森サポーターの会
緒方 潤



当会は2006年に活動を開始し、帯広の森の西側35haを管理しています。目標は帯広開拓前の森をつくり、次世代に残すこと。自然観察会やシラカバの樹液やクラフトを楽しむ、あるいは間伐などの研修を行うなど、「森を知る・森を育てる・森を楽しむ」をテーマに活動を行っています。

公園なので活動の制約はありますが、活動の成果で人が入れるように整備されたエリアが広がっていています。課題としては、活動する人が少なくなっていることや、高齢化と次世代の育成があって、市民にもっと知ってもらわなければならない、季節ごとに良さ・面白さがある。もっと感じて、楽しんでほしい、それが、森とつながることなのではないかと思います。

帯広地区の取り組み - 森との交流 -

コープさっぽろ帯広地区委員会
佐藤 智恵



帯広の森での団体交流は植樹も含め、多く計画していたものの、悪天候で延期が続き、6月27日に「森の散策とオニヤンマ作り」としてようやく開催できました。

帯広地区ではナイタイ高原などで植樹を続けてきました。2025年からは新得町に新たに植樹地を設け、池田町の「じゅんの森」とともに植樹を行いました。そのほか、自然体験を提供する「どんぐりとやまねこ」とも交流し、ネイチャーゲームをしたり、薪窯でピザを焼いて食べたりするなど、森での活動を行っています。何をしても怒られない、季節ごとに良さ・面白さがある。もっと感じて、楽しんでほしい、それが、森とつながることなのではないかと思います。

あすもりフォーラム 2025 のアーカイブは動画チャンネル「コープ未来の森づくり基金 TV」からご覧いただけます。
<https://www.youtube.com/watch?v=PnMIQfO6YAM>



Friends

森づくりの仲間

2026年度のアすもり高額助成を受けた2団体をご紹介します。それぞれの森づくりが北海道の森と人を豊かにつなげていきます。

かしの森とこどもの会

森のようちえんなどを運営する浦河町の学校法人フレンド恵学園が所有する森を整備して、子どもが身も心も健やかに育つ場をつくることを目指して2020年に設立した任意団体です。もともと整備されずに人も入れなかった50~60年の山林を、林野庁の助成金を活用しながら3年にわたり整備を続けてきました。施業の際には馬搬を用いるなど、森への影響をなるべく抑えた手法を採用して、うっそうとしていた森は、今では子どもが駆け回れる場所が増えています。

現在は薪割り体験や小屋づくりなど、子どもや地域の方とともに活動を広げていますが、水道やトイレがないことがネックとなっています。そこで寒冷地でも使えるバイオトイレと、雨水による手洗いを設置し、これを水や物質の循環を伝えるための教材としても活用しようと考えています。



NPO法人 森のころね

@ <https://www.instagram.com/morino.kokorone/>

「ころね」とは心の根っこ、本当の気持ちということ。みんなの心の根が育つ場所、誰もが自分らしいころねをもって生きていけるように、五感を育て、大人も子どもも多様性の中で、自分を愛し、自分らしく生きていくことを理念に、苫小牧市で活動が始まりました。

活動は日常型の森のようちえんをはじめとして、親子での活動や小学生まで含めた放課後自然体験活動、発達障害の子たちのための活動などさまざま。放課後自然体験活動の「ネイチャーキッズ」では自分の「やってみよう」を心ゆくまでやってみることをサポートしています。その中で、自分たちが居心地が良い場所を作りたいと始まったのがツリーデッキを作るプロジェクト。今後3年間をかけてみんなで作っていきます。

「ころね」の子どもたちの風景が、いつか「懐かしい」と思い出す風景になることを願い、この先も新しい景色を生み出していければと活動しています。



Report

あすもり・森づくり助成金 森づくり団体助成 贈呈式

3月3日、曇って冷たい風が吹いて、春が待ち遠しく感じたこの日、札幌会場とオンラインで道内各会場をつなぎ、第16回の森づくり団体助成贈呈式が行われました。

2026年度は高額助成が2団体、小額助成が18団体の、合計20団体が助成を受けることが決まり、各会場での目録授与が行われました。その後、高額助成団体である「かしの森とこどもの会」と「NPO法人森のころね」の活動紹介があり、ともに森で子どもを育てることをテーマにしながらそれぞれ特色のある活動や考え方が発表されました。発表後の質疑には、森で使う設備についての細かい質問や、植樹や焚き火についての技術的な疑問などがやりとりされました。

北海道には、ほかにも特色のある森づくりや、森と人をつなげる活動をしている団体がたくさんあります。そうした方々も合わせて、北海道の森づくり文化が多様に、深く根ざし長く続くよう、あすもりも支援を続けていきます。



Present

アンケート&プレゼント

「モリイクvol.31」いかがでしたでしょうか。今後の紙面づくりのために、アンケートにご協力をお願いします。

- Q1 モリイクを読んだ感想をお聞かせ下さい。
- Q2 面白かった記事・つまらなかった記事はどれですか？
右からそれぞれお選び下さい。
- Q3 森づくりの活動に参加したことがありますか？(はい/いいえ)
- Q4 コープ未来の森づくり基金の活動へのご意見があればお聞かせください。
- Q5 取り上げてほしい記事のテーマがありましたらお書き下さい。

巻頭コラム (P2) 森あそび研究所 (P4,5)
ひつじひろばへようこそ (P6~11)
木づかい (P12) 大きな木の小さな物語 (P13)
ほっかいどう 森のイキモノSOS (P14,15)
木育エッセイ (P16)
あすもりレポート (P17~19)

PRESENT!



アンケートに回答いただいた方から抽選で2名様に、「むかわのジビエ」さんから、シカ肉を使ったペットのおやつもしくは肉まん・ミートソースなどの加工品をプレゼントします。

※プレゼントの当選は発送をもって替えさせていただきます

応募方法

アンケートの回答は右の二次元コードより、住所・氏名・連絡先のご記入と合わせてお願いいたします。



応募締切 6/1(月) 当日消印有効

※あすもりやモリイクについてのお問合せは
右の「お問合せフォーム」二次元コードからどうぞ

コープさっぽろ環境推進グループ
〒063-8501 札幌市西区発寒11条5丁目10番1号



お問合せ
フォーム